

<論文>

三都市同盟とワステカ地域の征服

ロレンソ・オチョア

メキシコ国立自治大学 人類学研究所

(井上幸孝・古賀優子訳*)

【日本語要旨】

ワステカは文化的・経済的に重要な地域であったにもかかわらず、長らく研究者からは忘れ去られてきた。メキシコ湾岸北部に広がるこの地域には、テーネク（ワステカ）やその他様々な集団が古くからワステカ文化を開花させた。本稿では三都市同盟の構成者（テスココ人、メシーカ人）がそれぞれ異なる時期に行ったワステカ南部への征服を考察する。考古学・図像学・史料（絵文書含む）・文献学の情報をもとに実際に起こったであろう出来事を扱い、筆者が「架空の想像」と呼ぶ無批判な想像による仮説ではなく、様々な情報をもとに仮説を立てていくという手法を用いる。例えば、ツィコアクの商業センターやトチパンの場所の同定に見られるように、現地調査と史料から検証を行う。あまり知られていない文化であることから、テーネクの起源や社会・政治組織に関する議論も行うが、これはテスココ人とメシーカ人による征服がなぜ可能になったかを理解する上でも重要となる。

【キーワード】

ワステカ、テーネク、三都市同盟、アステカ（メシーカ）、征服

【目次】

はじめに

1. ワステカ人とは何者でどこから来たのか
2. ワステカの社会・政治組織
3. メキシコ中央部からワステカ地域への征服の理由
4. おわりに

.....
はじめに

本稿の目的は、ワステカ地域（図 1）に対する三都市同盟の征服について、いくつかの点を明ら

かにすることである。ワステカは先スペイン期メキシコの中でもほとんど注目されることのない文化である。メキシコ湾岸に位置するこの文化圏は複数の小規模な独立国家を形成しており、その豊かさゆえトルテカ人の、さらにその数世紀後には三都市同盟の標的となった。本稿で扱う問題にアプローチするにあたり、ワステカ地域に関してあまり知られていない諸側面、とりわけ政治的・社会的・経済的権力について述べる必要がある。その目的は、メキシコ中央部からの侵攻がいかに行われたかを理解するための展望を得ることにある。このような方法を通して一連の征服の重要性をより深く理解することが可能になると筆者は考えている。

本稿で扱うのは、三都市同盟に属する二つの集団—アコルワ（テスココ）人とメシーカ人—が、ワステカ地域南部のツィコアク（Tzicóac）およびトゥспан（Tuxpan）という商業センターに対して行った征服である。同地域北部にある重要な商業センター、オシティパン（Oxitipan）の征服については、残念ながら史料が少ないため、若干の考察のみを行う。とはいえ、オシティパンに関する数少ない記述は、異なる時期に起こったワステカ征服の範囲をより明確にするための一助になるだろう。同時に、これらの征服がいつ起こり、その結果同地域にどのような影響を及ぼしたのか、またその動機は何だったのか、という疑問についても部分的に明らかにしていく。さらにいくつかの事例に関して、文字史料や絵文書に記された出来事の解釈は、それが実際に起こった場所の実状はもろろんのこと、考古資料とも照合されるべきであるという点も提起したい。また、制限はあるものの、語彙集や辞書¹を使用することで、最終的な解釈において非常に重要な根拠が得られる。このように、考古資料および歴史資料双方を扱うこと、すなわち何年も前に歴史考古学と名付けられた手法を用いることで、想像が一人歩きしてしまうを防ぐだけでなく [Ochoa y Vargas 1986:189, n. 3]、残念ながら常に注意が払われてきたとはいえない年代背景の誤認にも気づくことになる [Ochoa y Vargas 1987:104-105]。

本稿の目的は、証明や照合のなされていない仮説の上に論を展開することではなく、確実な論拠に基づいて事実関係を想像しながら説明方法を得ることである。実際に情報との照合を実践しながら出来事の説明となる仮説を提起したいと思う。というのも、根拠のない想像は分析および照合のあらゆる可能性を超えてしまうからで、こうした立場を筆者は「架空の想像」と呼んでいる [Ochoa, en prensa]。最後に、三都市同盟の構成者であった二つの集団、アコルワ人とメシーカ人がワステカ地域の征服において果たした役割について、従来よりも根拠のある仮説を提起したいと思う。

1. ワステカ人とは何者でどこから来たのか

スペイン人が到来した時、ワステカ人（あるいはテーネク *tecnēk*²）はワステカ地域内の単なる一集団というわけではなかった。彼らは同地域の中で最も重要性を持ち、程度は様々であったものの、トトナカ人、テペワ人、パム人、オトミー人、そしてナワ人と領土を共有していた。これらの各集団について何らかの情報はあがるが、本稿で扱う出来事に関して中心的役割を果たしたのはナワ人およびテーネクである。考古学的にも言語学的にも、ワステカ地域におけるナワ人の存在および占拠がトルテカ人によるテアヨ（Teayo）への侵攻によってより明瞭になり、さらにその後のメシーカ人らの征服によって拡大したことは、推測の域を超えた事実と言える。少なくともこれが現在

までに分かっている最も確実な情報である。それ以前からこの領域に既にナワ人がいたとも考えられるが、それを実証する研究はなされていない。そもそも紀元前 500 年以前のワステカ地域に元来誰が居住していたのかも分かっていない。研究者の中にはその数世紀前にテーネク、すなわちワステカ人がこの地方に達していたと考える者もいる [vid. *infra* Edmonson 2004]。

テーネクが言語学的にマヤ系であることに疑問の余地はない。しかし、テーネクがいつ、どのようにしてワステカ地域に居住する—彼らは現在もベラクルス州北部およびサン・ルイス・ポトシー州南東部に居住している—に至ったのかについては、専門家の間でも意見の一致を見ない。もちろん、先スペイン期のテーネクの居住地域は上述の範囲だけではなく、タマウリパス州南部も含まれ、イダルゴ州やプエブラ州の一部にまで広がっていた可能性もある。

テーネクの起源に関する議論を追ってみよう。1953 年、マウリシオ・スワデッシュは、ワステカ語が今から 32 世紀前にマヤ系統から分岐し、紀元前 1000 年頃にメキシコ湾岸地域北部に到着した可能性を提唱した [Swadesh 1953:225]。他方、1964 年にノーマン・マクオン (Norman McQuown) は、紀元前 1500 年頃にメキシコ＝グアテマラ国境に近いグアテマラ高地のクチュマタネス山地においてワステカ語が原マヤ語から分岐し、そのすぐ後に北に向けて移動が起こったと考えた。

バーバラ・エドモンソンは、「テーネクに関するマヤの故郷」をさほど重要視せず、この問題を考古学の面から見る立場を取っている。この研究者は、マクオンと同様にテレンス・カウフマン (Terrence Kaufman) がクチュマタネス山地を原マヤ語の発祥地としていることに言及し、「ワステカ語話者はこの地域から紀元前 2000 年以前に今日のワステカ地域北部および西部に向けて移動を開始し、紀元前 1500 年から 1000 年頃にはこの地域に到達した」と述べている [Edmonson 2004: 299, 308]。逆にレオナルド・マンリケ・カスタニェダは、スワデッシュが提唱した時期よりも前にワステカ語と原マヤ語の分岐が逆方向、すなわち北から南へ起こったと提唱した [Manrique Castañeda 1983, 1989]。

この点が争点であり、議論がなされているが、未だ解決には困難を呈している。しかしながら、考古学の立場からこの問題を扱う場合、パヌコ I 期～II 期のいくつかの土器の分布が南から北への流れを示していることを考慮しておかねばならない [Ekholm 1944: 425-426; Ochoa 1979:28 y 59]。この点において、筆者はスワデッシュとマクオンの見解の方がより現実的であると考えている。実際、ゴードン・F・エクホルムは 1940 年代に土器の分布に関して考古学的視点からこの仮説を提示している [Ekholm 1944:505-506]。筆者は 1970 年代終盤にこの見解を例証した [Ochoa 1979: 25-27]。

上の説をもとに考えると、ワステカ人は紀元前 500 年頃にベラクルス北部に到着したと思われる [Ochoa 2003:38]。エクホルムの仮説には言及していないものの、ヘラルド・グティエレスも同様の見解を示している。彼は、この問題をかなり詳細に論じ、ワステカ人が「紀元前 350～100 年の間にパヌコ川岸に」達した可能性があるという結論を導き出している [Gutiérrez 2003:34]。

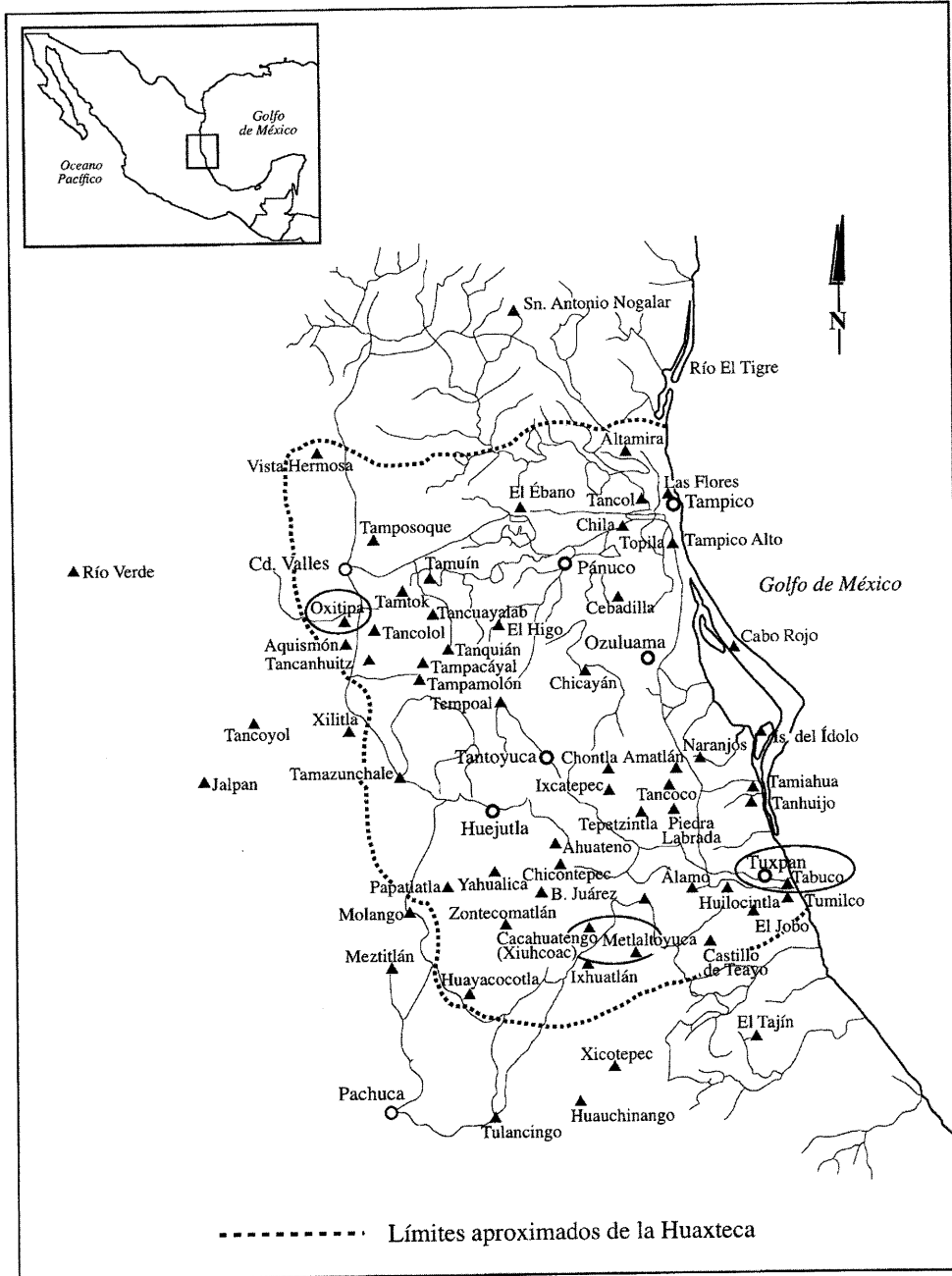


図1：ワステカ地域

2. ワステカの社会・政治組織

それから何世紀も後、ワステカ人は多くの集団と接触した。まず、8～9世紀頃にベラクルス中央部と接触を持った。さらに後には、メキシコ中央部のトルテカ人がワステカ地域に深い足跡を残し、ワステカの足跡もトゥーラや中央高原に残された。ヨーロッパ人による征服の直前には、ワステカ地域内の複数の地方がコルワ＝メシーカ人により侵略・征服された [Davies 1968; Ochoa 1979]。

ちょうどスペイン人による征服の時期、ワステカ地域は、ユカタンやタバスコ、ベラクルス中央部などと同様、独立国家群から成り立っていた。スペイン人はこれらを首長領 (señorío) あるいは地方 (provincia) と呼んだ。しかしながら、ユカタンやタバスコの政治形態 [Quezada 1993; Ochoa 1997] と異なり、ワステカ地域やトナカパン³ [Ochoa 1995] では、中央集権的な領主が各地方すなわち国家に君臨していた。ワステカ地域に関して、聖アウグスティヌス会士のニコラス・デ・ヴィッテは1554年に次のように書き記している。

それぞれの村にはメシコ、ミチョアカン、メツティトランのように、個別の領主がいた。しかし、ワステカすなわちパヌコの地はこれと異なり、独自の小さな土地が戦争をしたり都合のいい相手と同盟を組んだりしており、その様子はイタリアの所領に似ている。[Witte 1942: 49]

この修道士は、ワステカの貴族が三つの階級に分かれていると述べている。彼が記しているところによれば、それらはトラワン (Tlahuan)、ピピワン (Pipihuan)、ティアチャン (Tiachan) という名称であった。トラワンとピピワンはメシーカ人にとってのトラトアニ (Tlatoani) とピリ (Pilli) に相当するものであろう⁴。ティアチャンが何者であったかを同定するのは難しいが、敵を捕虜にして斬首し、その首を棒で貫いて家の前に飾っていたということから、ある種の戦士から成る階級だったと見られる。ベルナルディーノ・デ・サアグン (Bernardino de Sahagún) の情報提供者は、「敵に勝った時にはその頭部を切り落とし、その横に胴体を投げ捨て [...] 頭部を棒に突き刺す」と述べている [Leon Portilla 1965: 23]。史料に記述されたこの風習は、サン・ルイス・ポトシー州のタムイン (Tamuin) の壁画 (図2) や、ワステカ人の埋葬の習慣にも見られる [Ochoa 1979]。

ヴィッテは、この三つめの貴族階級のことを、「勇敢であることを意味するティアチャンと呼ばれる郷土」と述べている [Witte 1942:58]。ティアチャンは、アロンソ・デ・モリーナ (Alonso de Molina) 師が編纂した『カスティーリャ語・メシコ語、メシコ語・カスティーリャ語語彙集』によると勇敢な者、気力のある戦士を意味するティアカウ (*tiacauh*) [Molina 2004] に相当するようである。また、レミ・シメオンの『ナワトルもしくはメシコ語辞典』には、ティアチカウ (*tiachcauh*) という見出し語があり、文字通り勇敢な、気力のある大胆な長、あるいは中心人物という意味である [Simeón 1977]。

その一方で、アルフレド・ロペス・アウスティンは、ティアカウという語が「前進する者」を意味するとしている [López Austin 1985 :261]。この名称は、位の高い武将を指すものとして用いられていた。戦争に赴く際、彼らは装束の一部として大きな鈴を身に付けており [Durán, vol. I, cap. XIX; Alvarado Tezozómoc, cap. XXX-XXXI]、そうした武将の姿は『シコテペク絵文書 (Códice Xicotepetec)』にも描かれている (図3)。

ワステカ貴族の主な人々を指し示すのに使用されたこれらナワトル語の表現は、カルロス・デ・タピア・センテノ (Carlos de Tapia Zenteno) が編纂し 1767 年に出版した『ワステカ語概要』に収録された語彙を辿ることで確認できるだろう。実際、ワステカ語において上述のトラワンは、王子や領主と訳されているツアレイニク (tzalleinic) という語にあたるようである。この語は、支配者を表す *tzalle* と人を表す *inic* から成り、支配する人物という意味になる [Tapia Zenteno 1767: 80-81]。これはユカタン・マヤ語のハラチ・ウイニク (Halach Uinic) に相当するだろう。ツアレイニクは主要な町すなわちピチョウ (bichou; この名称は領主の息子たちが支配する大きな町を指すのにも用いられた) を支配した。ピチョウはクアムチャル (quamchal; 複数形クアムチャラブ *quamchalab*) と呼ばれる地区に分けられていたが、小規模な村や集落もクアムチャルの名で呼ばれていた [Gutiérrez y Ochoa, 2001]。実際のところ、中心部に隣接する地区と中心部から離れた集落の区別は彼らの間に存在しなかった。このことから、各区画が近くにあるか否かに関係なく、従属するすべてのクアムチャルにピチョウによる支配が及ぶとワステカ人が考えていたと言えよう [Gutiérrez y Ochoa, *op.cit.*]。それは、大越翼が村の統治者の支配下にある人々が耕作する土地全体から村の領域が決まると結論づけたユカタン・マヤ人の社会組織にある程度類似したものである [Okoshi 1995: 89]。

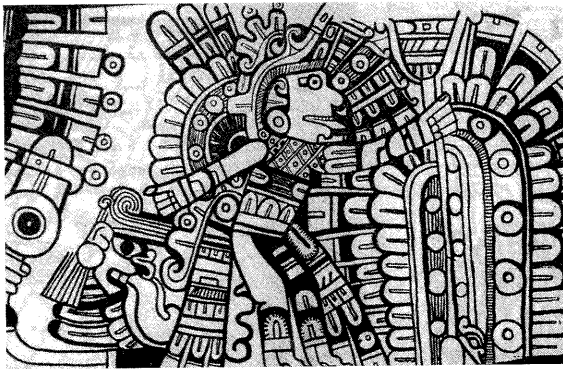


図 2: タムインの壁画



図 3: 『ショテベク絵文書』
のワステカ人

二つめの貴族階層ピピワンは、メシーカ貴族におけるピリ=テクトリと同一視して問題ない。ワステカ語では、アハティク (Ahjatic) と呼ばれており、直訳すると主人もしくは領主を意味する。アハティクという語はユカタン・マヤ語のアハウに相当すると思われる。この語はツアレイニクの息子、とりわけ大きな町を支配する長子に対して使用された。父系相続制であったため、この人物こそが、父親の死亡時に主たるピチョウのツアレイニクの地位を継承したのだった。ワステカ地域におけるアハティクは権力全般の象徴であるクァヤブラブ (Quayablab) と呼ばれる杖、つまり宮杖を携えていたことで識別される。ピチョウの構造がメシーカ人のアルテペトル (*altépetl*) に類似しているという誤った解釈が生まれた [Pérez Zevallos 2001: 33-34] のは、中心であるピチョウに從

属する村にこうした支配者が存在していたためであろうと筆者は考えている。とはいえ、オシティパ (Oxitipa) 領に関する研究において、ラミレス・ディアスは様々な点を論じ、ワステカ人の政治組織について筋道の通った議論を展開した上で「ニコラス・デ・ヴィッテ師がワステカ地域に独立した首長領が存在すると断言したことから裏づけられるであろう」と述べている [Ramírez Díaz 2000: 102]。

確かに、ヴィッテは、ワステカ地域には唯一の領主が存在せず、それぞれの地方に領主がいたことを強調し、「各々の小さな領地が戦争をしたり都合のいい相手と同盟を組んだりして」いたと述べている。残念ながら正確な情報がないため、ワステカ地域に存在した地方もしくは首長領の正確な数を知るのは不可能であるが、西洋的な概念で領地境界の存在を定めるのもまた妥当とは言えない。このような制限はあるものの、ワステカ内のいくつかの地方の境界を見極める試みがなされてきた [cf: Ramírez Díaz, 2000]。中には、相当広大な領土であった可能性のあるケースも存在する。実際、そうした広範囲にわたる地方の例は、フェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルシヨチトル⁵も書き記している。彼によれば、「広大なトチパン (Tochpan ; トゥспан Tuxpan) 地方はさらに7つの地方に分割されており、これら各々には合計 68 の村が従属していた」 [Alva Ixtlilxóchitl, vol. II: cap.: XXXIX]。

3. メキシコ中央部からワステカ地域への征服の理由

豊富な綿衣類の製造、農業 (8 種類のチリトウガラシ)・魚・エビ・乾燥魚卵・様々な鳥類の羽毛等の高度な生産ゆえに、ワステカ地域は標的にされ、外部からの征服の対象となった [cf: Durán, cap. XIX y Tezozómoc, cap. XXXI]。サアグン師は、わずかに数段落ではあるが、その地に存在した富を強調する記述を残している。彼は様々な特色を挙げており、例えば次のように述べている。

また、この場所は極めて暑く、あらゆる食料や果実がふんだんに産出される。さらにあらゆる種類の綿花や花や薔薇も植えられている。それゆえ、ここはトナカトラルパン「糧の地」、もしくは別名シュチトラルパン「薔薇の地」と呼ばれる。
[Libro Décimo, cap. XXIX]

しかしながら、上で見たいわば「バルカン的な」政治組織のために、ワステカ地域の征服はいくつかの地方でしか実現されなかった⁶。ロバート・H・バーロウは、ヌエバ・エスパーニャ副王領の文書類の研究に基づき、「オシティパンは、トゥランシゴやその他北部の町とともに、かつてのシャルトカン領の一部としての権利を回復した」と結論づけている [Barlow 1992, vol. 4: 76]。しかし、上述の通り、メキシコ中央部からワステカ南部には、最初にトルテカ人、次にテスココ人、最後にメシーカ人が到来したのである。

トルテカ人による占拠の証拠は、カスティージョ・デ・テアヨ (Castillo de Teayo) やポサ・ラルガ (Poza Larga) といった場所に残されている。アコルワ人による征服は、様々な情報を総合すると、1444 年頃ネサワルコヨトルの治世になされ、ワウチナンゴおよびシコテペクを起点として行われたと考えられる。少なくとも、ストレセール・ペアンの『シコテペク絵文書』の解釈 [Stresser Péan 1995:88] に従えば、ネサワルコヨトルの息子であるシパクトリという人物がシコテペクの統

治者として登場し、この人物はネサワルコヨトルの脇に描かれている。これに対し、ロペス・アウステインは、客観的ではあるが極めて慎重に、このテスココ王ネサワルコヨトルとされる人物に付された絵文字がコヨーテであるかを疑問視している [López Austin 1996] ⁷。ここではこの疑惑に詳しく踏み込まないが、筆者にはストレセル・ペアンの見解が正しいように思われる。というのも、以下に述べる歴史的出来事と一致する上、このシパクトリという動物が彫刻においても同様に表現されているからである [Cf: Religions & Histoire, núm. 7, p. 67, fig. 5, 2006]。

シコテペクを起点として、シパクトリはワステカ南部の征服に乗り出した。『シコテペク絵文書』には、その指揮官の一人「チコメ=テクパトル7=火打石のナイフ」が登場し、現在のメトラルトユカ (Metlatoyuca) に位置する要塞を攻撃する場面がある [Stresser Péan 1995:88-90; Graulich y Ochoa 2003]。ストレセル・ペアンに従えば、この戦闘行為は 1444 年の出来事である [Stresser Péan 1995: 88]。城壁を持つこの都市が存在した場所は、現在、セルコ・デ・ピエドラ (Cerro de Piedra ; ムニシビオ) 図4) として知られ、現代の町はメトラルトユカという名の行政区の中心になっている。

セルコ・デ・ピエドラの城壁の中には、大きな石の建造物、神殿、球戯場、掘り抜き井戸といった、戦争において非常に重要な役割を担った都市に必要な設備が存在する。15 世紀中葉以前、メシカ支配はまだ大西洋沿岸には達していなかったが、テスココはそうした遠隔地にまで支配を拡大していた。ネサワルコヨトルがクァウチナンコ (ワウチナンゴ)、シコテペク (シコテペク・デ・フアレスもしくはビジャ・フアレス)、トチパン (トゥспан)、ティサウコアク (ツィコアク) などの町に統治者や徴税吏を据えたことが史料から分かっており [Alva Ixtlilxóchitl, vol. II: cap.:XXXIX]、これらの町は多くの産品を貢納していた。



図4 : セルコ・デ・ピエドラの城壁



図5：『シコテペク絵文書』の戦闘場面

これらの場所の征服を成し遂げるためには、メトラルトユカにあるワステカ人の要塞を攻撃し、奪取する必要があった。その征服に参加した者のうち、アコルワ人の武将の一人が目立った働きをしたようである。この人物は「7=火打石のナイフ」と呼ばれ、史料の描写（図3、図5）によれば、鈴のついた装束や鼻飾りが特徴のワステカ人武将を捕らえ、勝利を収めた [cf: Durán, cap. XIX; Tezozómoc, cap. XXXI]。



図6：カカワテンゴ



図 7：貯水場所跡

さて、同地域の考古学的な確認を行ったところで、今度は場所の同定に関するいくつかの疑問を呈しておきたい。私はミシェル・グロリッシュとの共著論文において、『シコテペク絵文書』に描かれている戦闘行為の場所がカカワテンゴ（図 6）であったという可能性を示唆した [Graulich y Ochoa 2003]。だが、現在ではこの考えを捨て去るべきと考えている。実際のところ、メトラルトユカから程近い場所に位置するカカワテンゴは、入念に要塞化されたワステカの町というわけではない。急斜面に戦略上位置するがゆえに容易に防衛可能となるのであって、これは重要な商業センターの特徴である。そこにワステカ人は、大規模な建造物、大通り、建築物の集合体、祭壇、貯水場所を作った（図 7）。ホアキン・メアデがここを伝説的なツィコアクの商業センターと同定していること [Meade 1942:290-291] を考え合わせると、この町は、その豊かさゆえに、テスココの貢納都市になったと言えよう。現時点では、メトラルトユカの最後の居住跡と石彫のいずれからも中央高原の痕跡が強く見て取られ、カカワテンゴ（ツィコアク）でもそうした痕跡が明白である。実際、メトラルトユカには、完全にメシーカ様式と言ってよい円形の祭壇があり（図 8）、史料にはテスココ人にとってこの町がいかに重要だったかが的確に記されている [Alva Ixtlilxóchitl *ibidem*]。これらの事実およびメトラルトユカとの位置関係を総合すると、メアデの見解は正鵠を射ていると筆者には思われる。

アルバ・イシュトリルショチトルは、テスココ人によるツィコアクとトゥスパンの征服および両者が納めることになった租税の内容について記述を残している。ツィコアクは、例えば次のようなものを毎年納めていた。



図8：メトラルトユカの円形祭壇

王の部屋や居間に張り巡らされて使用されたあらゆる色の [...] のマント 1800 包み、 [...] 先が三つに分かれたイラカツウケのマント 100 包み、 [...] さらには、最高に精巧で繊細なマント 100 包み、 [...] ベタカ 400 個、鹿皮 400 頭分、生きた鹿 100 頭、チリ 100 荷、種子 100 荷、大型のオウム 100 羽、白い羽毛 40 本... [Alva Ixtlilxóchitl *ibidem*]

他方、トゥспан（トチパン）が毎年払わなければならないのは、次の通りであった。

上述の種類のマントが 1580 包み、さらに、マントとウィピル 25 枚、8 ブラサのイラカツウキのマント 10 枚と 4 ブラサのイラカツウキの薄いマント同数が 400 包みで、すべて合わせると 47645 枚ものマント、ナワ、ウィピルであった。[...] さらには、宮廷に使える女性や召使といった必要な人員 [...]。 [Alva Ixtlilxóchitl *ibidem*]

テスココによる征服後、ワステカ南部に関してこれといった出来事の記録はなく、どのくらいの期間、テスココに租税を納めていたかも分かっていない。確かなのは、そのわずか数年後、あるメシーカ人の商人集団がツィコアクとトゥспанの人々によって待ち伏せされて殺害され、テノチティトランがワステカ人に宣戦布告したことである [Durán vol. I, cap. XIX; Alvarado Tezozómoc cap. XXX-XXXI]。こうして、テノチティトランはワステカ南部の征服を開始したが、それは口実であった。というのも、1449～1454 年にメキシコ盆地で起きた飢饉が終わったその当時、ワステカ地域が豊かなのを熟知していたテノチティトランは湾岸部への拡張を目論んでいたからである。戦争の理由が正当か否かはともかく、トゥспан、ツィコアク、テマパチェの人々はメシーカ軍の大遠征隊から攻撃を受け、ワステカ南部の征服に拍車がかかった [Graulich y Ochoa 2003]。

こうした流れの中で、ワステカ地域内では、トチパンとツィコアクへ向かうルートとは異なるルートが用いられたものの、メシーカ人の征服はオシティパにも及んだ。このようなデータがあるにもかかわらず、ラミレス・ディアスは「この地域の [...] メシーカ帝国への服従を確定するに至

る」十分な証拠がなく、「[オシティパを] 独立した領土と考えなければならないだろう」と述べている [Ramírez Díaz 2000: 102]。しかしながら、『メンドサ絵文書 (Códice Mendocino)』において、オシティパはテノチティランへ貢納する地方として記載されている。そして、バーロウは、先述のようにかつてシャルトカンの支配下にあったと彼が考える「オシティパンのスペイン人支配者に対して、量は少ないものの、植民地時代初期、同様の品目が毎年貢納されていた」と指摘している [Barlow, 1992: 76-77]。

同じように、ツィコアクとトチパンは、豊富な市場を有するがゆえに、テノチティランがワステカ南部の中で最も手に入れたいと考える場所であった。バーロウは『貢納表 (Matricula de Tributos)』をもとに、両地方がテノチティランに納めていた物品を一覧にしている [Barlow, 1992: 81-87]。

ツィコアク	トチパン
織物： 青・赤・黄の縁飾り付きマント 400 荷 腰布 400 荷 長さ 4 ブラサの大型マント 808 荷 アンダースカートとウィビル 400 荷 紋章付き戦士服 2 着	織物： 白黒格子模様のマント 400 荷 赤・白のマント 400 荷 腰布 400 荷 長さ 4 ブラサの大型マント 808 荷 長さ 8 ブラサのオレンジ色縁飾り付きマント 816 荷 マント 408 荷 赤・黄の縁飾り付きマント 402 荷 アンダースカートとウィビル 400 荷 3 種類の豪華マント 240 荷 紋章付き戦士服 2 着
食料： 乾燥チリ 400 荷	食料： 乾燥チリ 800 荷
その他： 綿花 800 包み	その他： マント装飾用小さな白い羽毛 20 袋 チャルチウィテ 1 連 トルコ石 1 連 トルコ石モザイク盤 2 枚

また、バーロウは、「それ以前、トゥチパはアコルワ人に貢納品を納めていた集団の一つであった」とも述べている (Barlow 1992: 85, 87)。さらに、彼は、『メンドサ絵文書』に記された貢納量が『貢納表』のものより多いということも指摘している。さらに、エルナンド・アルバラード・テソソモク⁸は、トゥチパ [トウспан] が様々な種類のマント、色とりどりのオウム、赤いコンゴウインコ、豊かな羽毛の鳥類、カカオやチリなどの産品に加え、『『トゥシュパネカヨトル』と呼ばれる種類のマント」を納めていたとも証言している [Tezozómoc, cap. XXXI]。この記述を写したと考えられるアルバ・イシュトリルシヨチトルは、時代を取り違えて上述の貢納をテスココに宛てたものだとしているが、その量については正確であり、他の産品も付け加えている。彼によれば、「チリ 100 荷、種子 100 荷、大型オウム 100 羽、白い羽毛 40 本」も納めていたとされるが、実際には、これらはツィコアクが支払っていた租税の一部であった。

他方、トチパンが現在その名で呼ばれている川沿いの港と同じ場所ではなかったことも指摘しておかねばならない (図 9)。『ウエフトラ地誌報告書』⁹から確認されるところによれば、それはアモヨクという港で [Ochoa 1979: 115]、今では廃墟となっているタブコ遺跡のことである。タブコという名は、もはやほんの数軒の家しか残っていなかった頃にアロンソ・デ・ラ・モタ・イ・エスコ

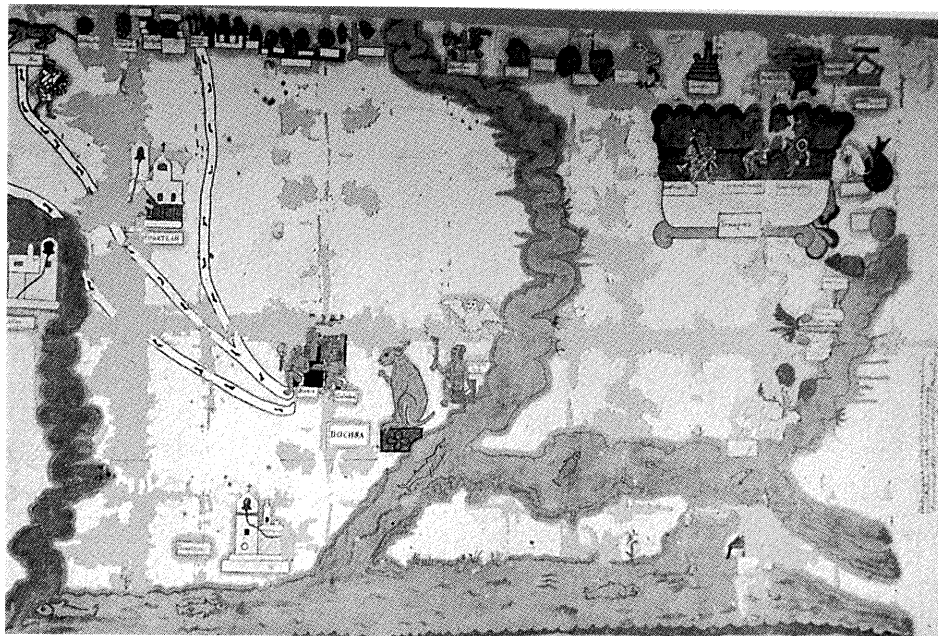


図9：トチパンの位置を示す地図

バル¹⁰が訪れ、タンクポ川に因んで名付けたものである [Mota y Escobar 1987: 74]。妙なことに、その規模の大きさは既に忘れ去られてしまっていて、彼が書いた『トラスカラ司教の覚書』では一切言及がなされていない。しかし、右岸の河口近くにはメキシコ湾岸において重要な市場がかつて存在し、そこにはカンペチェから塩が送られてきて、ワステカ内陸部に運ばれていた [Ochoa 1979: 115]。確かにアモヨクは早くに衰退しており、それゆえ、『トラスカラ司教の覚書』ではさして注目されなかった。実際、モタ・イ・エスコバルが 17 世紀初頭にこの辺りを通った時には、わずか 75 名の黒人とインディオを引きとめて洗礼を施しただけで、「これといったものはなかった」のである [Mota y Escobar 1987: 74]。

メシーカ人によるトゥспан征服の日付に関して正確な情報はない。ドゥランによればこの地方への侵攻はモクテスマ 1 世によってなされたが、その征服は永続的な性質のものではなかった。事実、アジャヤカトルは同地を再征服しなければならなかった。さらに後にはティソクがあらためて征服を行っており、その勝利はティソクの石として知られるモニュメントに記録された (図 10)。ティソクはツィコアクを服従させたが、メツティトランに対する軍事行動が失敗に終ると、同地方の従属も失った。さらに後の 1487 年、アウイツォトルはツィコアクに対して、中央のアトトニルコと南のトゥспанの二方向から挟み込むようにして攻撃を仕掛けた。こうして、テノチティトランはワステカ地域の大半の地方を征服するに至った。いずれにせよ、モクテスマ 1 世がトゥспанを服従させたことは極めて重要で、その征服から先住民暦で 52 年の節目の年に、1=死という日付の刻まれたモニュメント (図 11) が作成されたようである [Graulich y Ochoa 2003: 113]。

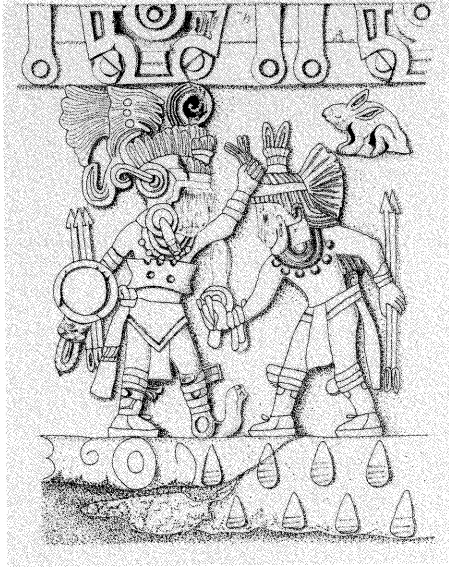


図 10：ティソクの石におけるワステカ征服の記録

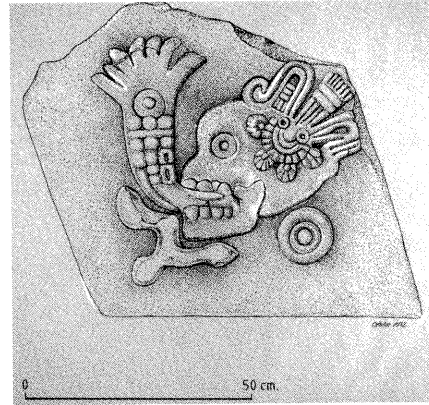


図 11：「1=死」の日付を示す彫刻

4. おわりに

上述のように、セルコ・デ・ピエドラことメトラルトユカの要塞の存在は非常に重要である。そこで、なぜそれが建設されたのかを明らかにすることが必要になる。この場所が有している特徴からして、その機能を説明することが不可欠である。それゆえ、いつ、何のため、誰から防衛する目的で建てられたのかを問わねばならない。

現時点では、メトラルトユカ一帯およびその前身となる場所について分かっている事柄をもとに、いくつかの仮説を立てることができるだろう。メトラルトユカには、いくつかのケースにおいてカステージョ・デ・テアヨのものに類似したメシーカの彫刻（図 12）があり、またこの場所はカステージョ・デ・テアヨから近い距離にある。このことを考慮に入れば、メトラルトユカはもともとワステカ人の町であったが、やがてアコルワ人、さらに後にはメシーカ人によって征服され、その結果、ツィコアク、トゥспанへの侵攻を許すことになったのではないだろうか。メトラルトユカは海岸部平地やワステカ南部海岸へ到達する上で戦略的な場所に位置していることから、城壁を建てる必要があったこと、そして攻撃を受けた際の水の供給源となる井戸を掘らねばならなかったことが、この推測の裏づけとなる。

このように、テスココやテノチティトランがワステカ征服に乗り出したルートの一つがこれであったと考えられる。現在までに分かっているデータは後古典期後期（1250～1521年）に限られているものの、メシーカの女神像（図 12）のような出土品はその証拠である。

以上のように、メトラルトユカの歴史はテスココ人とメシーカ人がワステカに対して仕掛けた、時間的に近い二つの時期の戦争に直接に関連している。上で見た通り、『シコテペク絵文書』がそ



図 12：メトラルトユカのチコモコアトル像

の根拠で、そこにはシパクトリと呼ばれるネサル
ルコヨトルの息子が統治者として登場し、かなり
確実にメトラルトユカと同定し得る砦に攻撃を仕
掛けている。さらに付け加えておくと、アルバ・
イシュトリルショチトルが書き記している貢納と、
『貢納表』および『メンドサ絵文書』に記録され
た貢納に混乱している部分があることも忘れては
ならない。それぞれが違う時期の出来事を記録し
ていることから、その内容が不正確かもしれない
ことは強調しておきたい。そして、これらの時期
の誤認が、三都市同盟によるワステカ侵略の範囲
を明らかにすることを妨げてきたのである。

最後に、以下の点を強調しておかねばならない。この事例からも分かるように、地理環境に関する知識、文字史料や絵文書はもちろん辞書や語彙集の使用、そして考古学的な情報から出発することによってはじめて、想像に頼りすぎることなく、分析対象の説明となる仮説を照合していくことが可能になるのである。

* 訳出に際しては、序・1・2 を古賀、3・4 を井上が担当した。相互に訳文を読み合わせた後、最終的な訳文の統一と訳注の作成は井上の責任で行った。

¹ (訳注 1) 16 世紀以降、ヨーロッパ人の修道士らが主に布教目的で作成した先住民語とスペイン語の対訳語彙集や辞書類を指す。

² (訳注 2) ワステカという用語はナワトル語クェシュテカ (cuexteca) に由来し、テーネクはワステカ語での名称。なお、日本語で出版されたテーネクに関する文献としては、現代までを視野に入れた次の概説がある。桜井三枝子「テーネク・マヤ (ワステカ) 文化に関する予備的研究」、『大阪経大論集』第 53 巻第 5 号、2003 年、245～272 頁。

³ (訳注 3) トトナカパン (Totonacapan) とは、ナワトル語で「トトナカ人の地」すなわちトトナカ地方のことで、北はカソネス川から南はアンティグア川までのメキシコ湾岸の地方 (現在のプエブラ州の一部およびベラクルス州に相当) を指す。

⁴ (訳注 4) ナワトル語でトラトアニは「話す者」を意味し、アルテペトル (都市国家) の統治者を指す。ピリは「息子」の意味で、世襲貴族を指す。

- ⁵ (訳注 5) フェルナンド・デ・アルバイシュトリルショチトル (1578–1650) はサン・フアン・テオティワカン領主家系の生まれで、テスココ王家の血を引くカスティソ。主にテスココの歴史を扱った複数の歴史書を書き残した。
- ⁶ (訳注 6) いわゆる「アステカ王国」による辺境地域の征服の詳細はあまり研究されておらず、今後の研究の進展を待たねばならない部分が多い。しかしながら、征服が即座に「王国」ないしは「帝国」的な構造へ完全に組み込まれることを意味するとは限らなかった点、そして広大な領土におけるアステカ支配の形態が決して一様ではなかった点は認識しておく必要があるだろう。支配の実態を知るには、征服された各地の政治形態にもっと目を向けていかねばならない。ワステカ地域に関しては、ここで著者が指摘しているように、独立国家群であったためにワステカ全土の征服という事態は起こらず (しかもワステカ北部には非定住民も存在していた)、いくつかの地方の征服しかなされなかった。こうした事例を他の辺境地域と比較する作業は、今後のアステカ研究の課題の一つである。
- ⁷ (訳注 7) テスココ王ネサルコヨトルの名は「断食するコヨーテ」を意味し、一般に絵文書ではコヨーテの絵文字でその名が示される。
- ⁸ (訳注 8) エルナンド・アルバラド・テソソモク (1538/39?–1609 以降) はメシーカ王家の直系の子孫で、メシーカ史に関する複数の記録文書を書き残した。
- ⁹ (訳注 9) 地誌報告書 (*Relaciones geográficas*) は、16 世紀後半にスペイン王室の指示によって各地で作成された報告書で、王室が準備した項目にしたがって町や地方の概要を回答したものである。
- ¹⁰ (訳注 10) アロンソ・デ・ラ・モタ・イ・エスコバル (1546 頃–1625) は、征服者の息子としてメキシコに生まれ、メキシコ大学やサラマンカ大学で学んだ。グアダハラハラおよびトラスカラ司教を務め、各地の先住民村落を巡り『トラスカラ司教の覚書』を著した。

参考文献

- Alva Ixtlilxóchitl, Fernando
1977 *Obras Históricas*. UNAM, Instituto de Investigaciones Históricas (Serie historiadores y cronistas de Indias 4), México, 2 volúmenes.
- Alvarado Tezozómoc, Hernando
2001 *Crónica Mexicana*. DASTIN, S.L.(Crónicas de América), Madrid.
- Barlow, Robert H.
1992 *La extensión del imperio de los culhua mexicana*. INAH-Universidad de las Américas (Obras de Robert H. Barlow, vol. 4), México.
- Códice Xicotepc
1995 *Códice Xicotepc*. Estudio e interpretación de Guy Stresser Péan, Centro Francés de Estudios Mexicanos y Centroamericanos, Gobierno del Estado de Puebla, Fondo de Cultura Económica, México.
- Davies, Nigel
1968 *Los señoríos independientes del imperio azteca*. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México.

Durán, fray Diego

1965 *Historia de las Indias de Nueva España y Islas de Tierra Firme*. Ed. Nacional, México, 2 volúmenes.

Edmonson, Barbara

2004 Investigación lingüística del huasteco. En *La Huasteca, un recorrido por su diversidad*, J. Ruvalcaba Mercado, J. M. Pérez Zevallos y O. Herrera (coordinadores), pp.295-318, CIESAS-El Colegio de San Luis A.C.-El Colegio de Tamaulipas, México.

Ekolm, Gordon F.

1944 Excavations at Tampico and Panuco in the Huasteca, Mexico. *Anthropological Papers of the National Museum of Natural History*, vol. XXXVIII, New York.

Graulich, Michel y Lorenzo Ochoa

2003 La Lápida de la Calzada, ¿una representación de conquista en el sur de la Huasteca? *Anales de Antropología*, vol. 37, pp. 93-116, UNAM, Instituto de Investigaciones Antropológicas, México.

Gutiérrez Mendoza, Gerardo

2003 Interacción de los grupos lingüísticos en la costa del Golfo de México: el caso de la separación de geográfica del idioma huasteco del resto de las lenguas mayas. *¡Viva la Huasteca! Jóvenes miradas sobre la región*, J. M. Pérez Zevallos y J. Ruvalcaba Mercado (eds.), pp. 25-39, CIESAS-El Colegio de San Luis, México.

Gutiérrez, Gerardo y Lorenzo Ochoa

2001 Political Geography and territoriality in ancient Southern Huasteca, Mexico. Ponencia presentada en the *Annual Meeting of the Society for American Archaeology*, Chicago.

León Portilla, Miguel

1965 Los huastecos según los informantes de Sahagún. *Estudios de Cultura Náhuatl*, vol.V, pp. 15-29, UNAM, Instituto de Investigaciones Históricas, México.

López Austin, Alfredo

1985 *Educación mexicana. Antología de textos sahuaguntinos*. Selección, paleografía, traducción, introducción, notas y glosario de Alfredo López Austin, UNAM, Instituto de Investigaciones Antropológicas, México.

López Austin, Alfredo

1996 Reseña al estudio e interpretación del *Códice Xicotepec* (vid supra). *Historia Mexicana*, XLVI(3), pp. 653-658, El Colegio de México, México.

Manrique Castañeda, Leonardo

1983 Conclusiones. En *Antropología e Historia de los mixe-zoques y mayas: Homenaje a Frans Blom*, L. Ochoa y Th. A. Lee (eds.), pp. 461-481, UNAM-BYU, México.

Manrique Castañeda, Leonardo

1989 La posición de la lengua huasteca. En *Huastecos y totonacos. Una antología histórico-cultural*, presentación, introducción y selección de textos de L. Ochoa, pp. 206-224, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, México.

McQuown, Norman A.

- 1964 Los orígenes y la diferenciación de los mayas según se infiere del estudio comparativo de las lenguas mayanas. En *Desarrollo cultural de los mayas*, E. Z. Vogt y A. Ruz L. (eds), pp. 49-80, UNAM, México.

Meade, Joaquín

- 1942 *La Huasteca. Época antigua*. Editorial Cossío, México.

Molina, fray Alonso de

- 2004 *Vocabulario en lengua castellana y mexicana y mexicana y castellana*. Estudio preliminar de M. León Portilla, Editorial Porrúa, (Biblioteca Porrúa de Historia 44), México, 5ª edición.

Mota y Escobar, Alonso de la

- 1987 *Memoriales del Obispo de Tlaxcala. Un recorrido por el centro de México a principios del siglo XVII*. Introducción y notas de A. González Jácome, Secretaría de Educación Pública (Quinto Centenario), México.

Ochoa, Lorenzo

- 1979 *Historia prehispánica de la Huasteca*. UNAM, Instituto de Investigaciones Antropológicas, México.
- 1995 La zona del Golfo en el Postclásico. En *Historia antigua de México*, vol. III, L. Manzanilla y L. López Luján (eds.), pp.11-53, INAH-UNAM- Miguel Angel Porrúa Grupo Editorial, México.
- 1997 En los límites de la imaginación. En *Tabasco: apuntes de Frontera*, M. Ruz (compilador), pp. 15-40, CONACULTA, Coordinación Nacional de Descentralización, México.
- 2003 La costa del Golfo y el área maya ¿relaciones imaginables o imaginadas? *Estudios de Cultura Maya*, n. 24, pp.35-54, México, UNAM, Centro de Estudios Mayas.
- (en prensa) La vara, el abanico y el tiburón. Denotación del poder político-religioso en la Costa del Golfo. En *Imagen, símbolos, y metáforas del poder en Mesoamérica*, G. Olivier (ed.), UNAM, IIAH-IAA, México.

Ochoa, Lorenzo y Ernesto Vargas

- 1986 La importancia de las rutas de comunicación en la arqueología de superficie. *Revistas Mexicanas de Estudios Antropológicos*, t. XXXII, pp. 17-204, Sociedad Mexicana de Antropología, México.
- 1987 Xicalango, puerto Chontal de intercambio: mito y realidad. *Anales de Antropología*, v. XXIV, pp. 94-114, UNAM, Instituto de Investigaciones Antropológicas, México.

Okoshi Harada, Tsubasa

- 1995 Tenencia de la tierra y territorialidad: conceptualización de los mayas yucatecos en vísperas de la invasión española. En *Conquista, transculturación y mestizaje. Raíz y origen de México*, L. Ochoa (ed.), pp. 81-94, UNAM, Instituto de Investigaciones Antropológicas, México.

Quezada, Sergio

- 1993 *Pueblos y caciques yucatecos. 1550-1580*. El Colegio de México, México.

Pérez Cevallos, Juan Manuel

2001 *Visita de Gómez de Nieto a la Huasteca (1532-1533)*. CIESAS-Colegio de San Luis-Centro Francés de Estudios Mexicanos y Centroamericanos-Archivo General de la Nación, México.

Ramírez Díaz, Filiberto

2000 *La organización territorial del señorío de Oxitipa. Siglo XVI*. ENAH (tesis de licenciatura), México.

Religions & Histoire

2006 *Religions & Histoire*. Núm. 7, París.

Simeón, Remi

1977 *Diccionario de la lengua nahuatl o mexicana*. Editorial Siglo XXI, México.

Stresser-Péan, Guy

véase *Códice Xicotepec*, 1995.

Swadesh, Morris

1953 The language of the archeological Huastec. In *Notes on Middle American Archaeology and Ethnology*, vol. IV, n.114, pp. 223-227, Carnegie Institution of Washington, Washington D.C.

Tapia Zenteno, Carlos de

1767 *Noticia de la lengua huasteca*. Imprenta de la Bibliotheca Mexicana, México.

Witte, Nicolas de

1942 Parecer de fray Nicolás de San Vicente Paulo, de la Orden de San Agustín, sobre el modo que tenían de tributar los indios en tiempo de la gentilidad. Mextitlán, a 27 de agosto de 1554. En *Epistolario de Nueva España*, Francisco del Paso y Troncoso compilador, vol. XVI, pp. 56-62, Antigua Librería Robredo, México.

La Triple Alianza en la conquista de la Huasteca

Lorenzo Ochoa

(Instituto de Investigaciones Antropológicas-UNAM)

Traducción japonesa: Yukitaka Inoue y Yuko Koga

Key words: Huasteca (huasteca), teenek (tenek), Triple Alianza, azteca (mexica), conquista

A la llegada de los europeos a territorio de lo que ahora es México, tal vez una de las más importantes áreas no sólo por su riqueza cultural sino económica, haya sido la de la Huasteca, la cual, hasta hace unos 25 ó 30 años, era de las más olvidadas por los especialistas. Allá, grupos de habla *teenek* o huasteca, nahua, otomi, pame, totonaca y tepehua, desarrollaron la cultura huasteca, que recibió el nombre del primero de estos grupos. Esta cultura, una de las más antiguas del México prehispánico, se extendió y desarrolló al norte de la costa del Golfo y tierradentro, muchos siglos antes que los mexicas aparecieran en el escenario geográfico y cultural del México prehispánico. Mas todavía, su auge cultural se remonta a la segunda mitad del primer milenio d.C. y alcanzó su apogeo de manera contemporánea a los toltecas y lo conservó a lo largo del desarrollo y esplendor de los mexicas y la integración de la Triple Alianza conformada por Texcoco, Tlacopan y Tenochtitlan. En este trabajo precisamente, el autor da cuenta de las conquistas que, a causa de las riquezas del territorio huasteco, llevaron a cabo en distintos momentos dos de los integrantes de la Triple Alianza: primero los texcocanos y más tarde los aztecas, buscaron las riquezas que siglos atrás, aparentemente, codiciaron los toltecas y trataron de conseguir de acuerdo con las fuentes históricas. Las conquistas mexicanas, como se las conoce, aunque de manera fragmentaria han recibido atención en varias ocasiones por distintos autores que se han ocupado de investigarlas en relación con determinados lugares de aquella área, exhibiendo sus hipótesis explicatorias que, en esta ocasión el autor no analiza una a una, aunque al final plantea las suyas,

relacionadas con el papel jugado por texcocanos y mexicas en la conquista del sur de la Huasteca. Sin embargo, es quizás aquí la primera vez que se aborda de manera puntual el fenómeno relativo a la conquista de los mercados del sur de esa área cultural. Ahora bien, en esta investigación al autor le interesa dibujar su explicación imaginando los sucesos a partir de argumentos que confrontó desde diversas fuentes. En efecto, para alcanzar sus objetivos, analizó la información emanada de la arqueología, la iconografía, las fuentes históricas (escritas y pictóricas), tanto como desde el campo de la filología. En fin, recogió aquellas noticias que relativas a los sucesos que fueron piedra angular para la economía de Texcoco primero y después para Tenochtitlan. En este sentido, lo que el autor persiguió fue confrontar datos de naturaleza diversa, ya que plantea que imaginar sin fundamentar, rebasa toda posibilidad de análisis y confrontación, una postura que de tiempo atrás y en otras publicaciones denomina imaginación fantástica, que no debe confundirse con ciencia ficción. Por ejemplo, la identificación que hace de los centros económicos de *Tzicóac* y el puerto fluvial de *Tochpan*, especialmente la ubicación del enclave de este último, no tiene un origen empírico, es resultado de un detenido análisis y confrontación de las fuentes históricas, escritas y pictóricas, con sus datos de campo. En fin, por tratarse de una cultura poco conocida, el contenido de este escrito lo enmarcó dando sus puntos de vista acerca del origen mayanense de los teenek, a la vez que se ocupó de hablar del porqué de la presencia nahua y otomí en aquella área cultural, todo ello arropado con imágenes relativas a la organización social y política que había en la Huasteca al momento de la Conquista europea. Esto lo hizo también, con el propósito de explicar cómo y por qué fue posible la conquista de algunos de los señoríos huastecos por dos de los integrantes de la Triple Alianza en la segunda mitad del siglo xv.

原稿受領日 2007年7月15日

採択決定日 2007年9月23日

